

【聖書箇所】ルカ福音書 11:5～13

ルカ 11:5 また、弟子たちに言われた。「あなたがたのうちのだれかに友達がい
て、真夜中にその人のところに行き、次のように言ったとしよう。『友よ、パン
を三つ貸してください。6 旅行中の友達がわたしのところに立ち寄ったが、何
も出すものがないのです。』7 すると、その人は家の中から答えるにちがいな
い。『面倒をかけないでください。もう戸は閉めたし、子供たちはわたしのそば
で寝ています。起きてあなたに何かをあげるわけにはいきません。』8 しかし、
言っておく。その人は、友達だからということでは起きて何か与えるようなこと
はなくても、しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであらう。
9 そこで、わたしは言っておく。求めなさい。そうすれば、与えられる。探しな
さい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。10 だ
れでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。11
あなたがたの中に、魚を欲しがる子供に、魚の代わりに蛇を与える父親がい
るだろうか。12 また、卵を欲しがるのに、さそりを与える父親がいるだろうか。
13 このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物
を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださ
る。」

1 祈りについての主の答え

私達は「父よ」という親しい呼びかけから始まる主の祈りを一つ一つを、二
カ月かけて、ご一緒に味わってまいりました。しかし、主の祈りについての聖
書テキストはそれで終わりではありません。確かに祈りの言葉は、4節までです
が、11章1節の「わたしたちにも祈りを教えてください」という弟子達の願いに
対する主イエスの答えは、今日の箇所まで続いています。11章の1節から13
節までは、祈りについての一まとまりの教えです。主イエスは祈りの具体的な
言葉に続く今日のテキストで、弟子達に、私達にどのような事を伝えようとされ
たのでしょうか、ご一緒にみていきたいと思います。

2 たとえ話

5節～8節、今日のテキストの前半は譬え話です。イエス様は「あなたがた
のうちの誰か」と語りはじめ、弟子達に、真夜中に友人の家を訪ねてパンを頼
む自分を想像させようとしています。当時の庶民の家は一部屋かせいぜい二
部屋、食べ物を探すには明かりをつけなければならず、音もします。戸を開け
れば冷たい外気も入って来て、結果として家族を起こしてしまうでしょう。だか
ら、真夜中に人を訪ねるなんてはた迷惑な行為です。

ですが、この譬え話の中では、弟子は自分のためにそんな事をするのではありません。ある友人が真夜中、旅の途中にお腹をすかして立ち寄った、弟子はなんとかしたいと思い、近くに住む別の友人の家に行き「パンを三つ貸してください」と頼みます。しかし、真夜中にそんなことを頼んで「面倒をかけないでください」と言われるにちがいない。でも、「しつように頼めば」起きてきて必要なものを何でも与えてくれるだろう。この譬話は、御神に対して執拗に頼むこと、求め続けることの大切さを教えるものだとして解釈されてきました。神さまに祈り願うのであれば、一度や二度断られたからと言って引き下がらずに祈り続けなさい。人は相手が本気かどうかを見る、人を動かすのはあなたの「本気度」だ。天の父だって同じことだ…というのです。

「求めなさい。そうすれば与えられる」で始まる9節もそうだと言われている。9節を正確に訳せば、「求め続けなさい。そうすれば与えられる」ですし、「捜し続けなさい」「たたき続けなさい」です。必死になって求め続けていれば、探し続けていれば、叩き続けていれば、神様はきっと答えてくださるという意味で解釈されてきました。私自身も、ずっとそう理解してきました。

3 祈り続けること

確かに祈ることで求められている一つは、諦めずに祈り続けることでしょう。今日祈って、明日何かが起こらなければ祈らなくなる…とすると、それは祈りとはいえないかもしれません。何年も何十年も信じて祈り続けることこそ、真実の祈りとも言えます。「主の祈り」じたいがそうです。主の祈りは、この二千年間、キリスト者によって祈り続けられています。

二千年間も祈られ続ける理由の一つは、祈り求めていることが実現していないからです。天上・地上・地下のあらゆるものが膝を屈めて「イエス・キリストは主である」と告白して、父である神を賛美する神の国は、まだ完成してはいないのです。だから、私たちは祈り続けます。「御名が崇められますように」「御国が来ますように」と。主の祈りを止めることは、キリスト者として生きることを止めることです。

しかし、私たちが祈り続ける理由は、祈り求めている事がまだ実現していないから…だけではありません。私たちが、「父よ！」と祈り続ける最大の理由は、神さまの私達への愛を確信するからです。私達もまた神さまを愛しているからです。この神の愛に対する確信がなければ、私たちは「お父ちゃん！」と信じて呼びかけることなどできません。親が自分を愛していないと思った子どもは、信頼と親しみをこめて「お父ちゃん」「お母ちゃん」と呼びかけることはできず、何かを願ったり、今日あったことを親に報告したりできません。自分を愛してくれない親とは、交わりを求めることもせず、心と口を閉ざし、目を合わせることもしないでしょ。しかし、自分に対する愛を確信できて、自分も親を愛していれば「お父ちゃん」「お母ちゃん」と呼びかけ様々な話をする。そんな親と

の交わり自体が嬉しいのです。祈りは、父なる神さまとの交わりです。私たちは聖書を読みながら祈るのです。神さまの語りかけを聴きつつ、私達も語りかけるからです。礼拝もそういう祈りの時です。そのような父なる神との親しい交わりの中に生きることで、私たちは最上の幸せを味わいます。神さまが今も生きて働いておられ、自分を深く愛してくださっている、そしてその愛によって自分も御神を愛していることを確信できるからです。信頼できる、愛し合える存在を確信できる生活こそ幸せなことはありません。

4 たとえ話の真意

今日のたとえ話で主は繰り返し祈る事の大切さだけを仰っておられるのか…というと、実は、はっきりしないのです。それとは別の読み方ができる所、非常に分かりにくいところだからです。特に解釈が難しいのは8節です。「しかし、言っておく。その人は、友達だからということでは起きて何か与えるようなことはなくても、しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう。」。新共同訳聖書では「しかし、言っておく」となっていますが、原文には「しかし」はありません。なぜ翻訳者が「しかし」を入れたかと言うと、その後の文章を「しつように頼めば」と解釈するからです。つまり、「友達は友情だけでは起きてくれなくても『しつように頼めば』起きてくれるはずだ」とするのが、伝統的で一般的な解釈です。しかし、「しつように頼めば」と訳されている部分、原文では「頼めば」という動詞はありません。また「しつように」と訳されている単語は 新約聖書のここにしか出てきません。だから聖書学者の中でもどう訳すべきか見解が分かれています。本来、この単語には「恥知らず」という意味があります。8節「しつように頼めば」を直訳すれば、「彼の恥知らずのために」となります。「その人は、友達だからということでは起きて何か与えるようなことはなくても、彼の恥知らずのために、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう。」です。

では、何が恥知らずなのでしょう。何が「恥知らず」なことか、何が不名誉なことかは文化によっても、時代によっても異なります。昔の日本では、旅人をもてなすことは、とても重要なことで事でした。旅人に頼られるとは名誉なことであり、旅人を盛大にもてなすことによって、家の名が上がったのです。中東の部族社会では、今でもその風習は強いようです。もし、真夜中とはいえ訪ねてきた旅人に食事を出さず追い返すようなことは、不名誉なことであり、情け知らず恥知らず者として名が広がってしまい、その部族の中ではまともな人間として扱われなくなります。

そういう背景を考えながら読むと、旅人をもてなしたいという友人の求めを断る事が「恥知らず」であり不名誉ということだと分かります。そして、実は5節から7節は、原文では一つの長い文であり、「そんな人はいないのではないか？」という否定の答えを期待する疑問文の形です。だから、5節から7節を

訳しなおすようになります。「あなたがたの友人の中には、『面倒をかけないでくれ、子ども達が起きるではないか』と言ってあなたの求めを断るような恥知らずなことをする人がいるだろうか。いや、いるはずがないだろう」となります。ですから、この譬話で強調されていることは、友人に対する絶大な信頼です。真夜中だろうが何だろうが、私が求めれば友達は必ず答えてくれるに違いないという確信なのです。

5 天の父に対する信頼

その解釈に基づいて八節を訳すようになります。「わたしはあなたがたに言う。その人は友達だからということではなく、その人自身の名誉のために起きてきて、あなたの必要とするすべてのものを与えるだろう。」ここに出てくるパンを頼まれる友達としての「その人」は、13節の結論に出てくる「天の父」を示しています。何故なら、こんな人は実際にはいないからです。譬話の中では6節で「友よ、パンを三つ貸してください」となっています。「貸してください」とは、「必ず返す」ということです。そして、借りる物も「三つのパン」とはっきりしています。しかし、7節でのこの友人の「仮に」の返事でも「起きて何かをあげるわけにはいきません」とあります。仮に断る場合にしても既に「貸す」のではなく「与える」ことが前提で断っています。また7節から13節までの間に「与える」という言葉は6回も出てきます。「貸す」ではないのです。無償で与えるのです。そして、与えるものは、「彼の必要とするすべて」です。「パンを三つ」どころではなく、「必要なものすべて」を「貸す」のではなく「与える」のです。真夜中に尋ねて来た友だちに、こういうことをする人は現実にはおらず、天の父である御神こそそのなさり方です。イエス様は日常生活にもある人間的な譬話をしつつ、ここで神の話を始めておられます。

そして、「わたしは言うておく。求めなさい。・・・探しなさい。・・・門をたたきなさい」と続けられました。つまり、「あなたがたが求める相手は、人ではなく神なのだ。それも、あなたがたの父となってくださった神なのだ」とイエスさまは仰っています。

その父が私達に善きものをくださることをイエス様は、10節から人間の親を譬えとして語ります。子どもが魚を欲しがる(求める)のに蛇を与え、卵を欲しがるのにさそりを与える父親はいません…と。魚と蛇はうろこがあるから似ているし、丸まったさそりは卵に似ています。つまり、子どもが求めるものに似ているからといって、子どもに害をなす悪いものを親は与えないだろう…というのです。13節の「あなたがたが悪い者でありながら」とは、「神の御心を知らない者でありながら」という意味です。神の御心を知らない私達人間でさえ「自分の子供には良い物を与えることを知っている」。「まして天の父は」「まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる」とおっしゃるのです。

6 何を求めるのか

9節～10節の「求める」「探す」「門をたたく」は、その対象が神である時はすべて祈りを意味しますので、内容的には一つのこと。しかし、何を求め、探し、門をたたくのかについてイエス様はお語りになっていません。それは、直前に「主の祈り」があるからでしょう。主イエスが教えてくださった祈りを祈ることが「求め」「探し」「門をたたく」ことだということです。そして、その主の祈りは、実は一つのことを祈っています。その一つのこととは、神様を「父よ」(アッバ)と呼ぶこと。自分だけでなく、すべての人々が神様を「父よ」と呼ぶことが出来るようにという祈りです。御神を父よ(アッバ)と呼び、御名を崇めるところに御国が現れます。そこには、生きるに必要な糧があり、罪の赦しがあり、誘惑からの守りがあります。

そしてパウロは、また、このように言っています。「神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、『アッバ、父よ』と呼ぶのです。この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒に証ししてくださいます。もし子供であれば、相続人でもあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。」(ローマ8:14～17)

キリストと共に何を相続するのかと言えば御国です。キリストの復活に与る神の国です。誰もが神の御顔を拝して「父よ」と呼んで賛美出来る所、親しい神との交わりに生きることが出来る所、私たちの究極の救い、最上の幸福があるところです。私たちはそこに向かって生きています。それが私たちの希望です。様々な試練、誘惑に遭い、挫折と失敗を繰り返し、しばしば絶望的な気分になり落ち込みつつも、私達が前を向き生きていけるのは、絶望や挫折、失敗による痛みや苦しみをはるかに凌駕する希望が私たちには与えられているからです。神の国への希望が与えられているからです。

ではどうして、弱い私達が神の国への希望を抱き続ける事が出来るのでしょうか。それは、先ほどのパウロの言葉にもあったように、神の御子の霊、聖霊が与えられているからです。見えないイエス様、聖霊が注がれる時、私たちの心はイエス様の息吹に生かされ、御国への希望が与えられ続けます。そして「高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」(ローマ書 8:39)と神の愛の確かさを確信し、「アッバ、父よ」と呼びかけ、賛美することが出来ます。ですから、御国を求める主の祈りを祈る私たちが、父なる神に求めるべきものは聖霊なのです。聖霊こそが、私たちに確かな希望、生きる喜びを与えてくださるからです。

7 神の国を求めなさい

今日の箇所だけを読むと、神様の愛を信じて祈り求めれば、父なる御神は私達にどんなものでも与えてくださると、主はおっしゃっているように思えます。ですが、イエス様はそんなことをおっしゃっているではありません。信仰をもって祈るとは、聖霊の導きの中で祈ることです。神様の御心の実現を求めて祈るのです。自分達の理想や願い、自己正当化ではありません。私達は往々にしてそういう間違ったものを、そうとは気づかずに祈り求めることがあります。そのような傾向がある事を心に留めておくことは大切ですが、心配しすぎることはありません。私達が間違ったものを「アッバ、父よ」と祈り求めていても、父なる神は聖霊をお与えくださり、祈りの中でその間違いに気づかせてくださるからです。そして、悔い改めに導かれます。私達は、祈りのうちに、神を自分に引き寄せるのではなく、自分が神に引き寄せられる事を学んでいくのです。だから、祈りは私達を新たなものへと造り変える場でもあります。私たちが「父よ」と呼んで祈る神様は、自己中心的に祈る私たちをさえ愛し、常に最上のものを与えようとしてくださっているお方だからです。何故なら、この神様は「その独り子をお与えになるほどに世を愛」てくださる神だから。自分ではなく、この神にこそ全身全霊を捧げて「アッバ、父よ」と祈ることが出来る時、私達を神の民として変え続ける神の力が働きます。そこにこそ神のご支配が現れるからです。

8 先に門をたたいてくださるのは

そして、祈りの内で私たちは大切なことに繰り返し気づかされます。それは、先ず、神様の方が私たちを求め、探し、その心の門をたたいてくださっているということです。ヨハネの黙示録にこういう言葉があります。「わたしは愛する者を皆、叱ったり、鍛えたりする。だから、熱心に努めよ。悔い改めよ。見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。勝利を得る者を、わたしは自分の座に共に座らせよう。わたしが勝利を得て、わたしの父と共にその玉座に着いたのと同じように」(ヨハネ黙示録3:19～22) 祈りの時、聖霊が私達にこの言葉を聞かせてくださいます。そして「アーメン、主イエスよ、信じます」と応答させてくださいます。聖霊こそ、私たちを神の子とする信仰を与えてくださるものであり、真の父である天の父の愛を知らせてくれるものだからです。その聖霊を求める者であれば誰でも、神様は聖霊を与えてくださいます。たとえこの世においては取り返しがつかない過ちを犯してしまった者でも、人には赦されない者でも、罪の赦しと新しい命を与えてくれる聖霊を求めるならば、天の父はご自身の名誉にかけて聖霊を与えつつ「我が子よ。よく帰って来た。待っていた」と言って抱きしめてくださいます。

私たちは、聖霊を与えられることによって、イエス・キリストの十字架と復活を通じて私達を救ってくださる父なる神を知ることができます。そして、祈りの内に、父なる神の語り掛けを聴き、また自分の願いを述べ、そして、父なる神が如何に深く、如何に大きく、如何に高く、如何に長く、私達を愛してくださっているかを味わい知ることができるのです。こんなにも私を愛してくださっている！それを知ることができる。そして、今日も万感の感謝をもって「アッバ、父よ」と呼ぶことが出来ます。こんな「恵み」も幸福も他にはない、なにものにも代えがたいものです。横浜ナザレン教会の一人お一人と共に、神の愛の内に生きる喜びを感謝し、まだイエスさまを知らない一人でも多くの方々に伝えていきたいと切に祈ります。